探訪記

長久手のお城 長久手城

長久手城址は城屋敷の一角に小さな公園として残されています。

遺構は消滅し、城主ゆかりの観音堂、子孫が供養のために建てた石標、昭和58年、有志により寄進されたお地蔵様などがあります。

城ではなく城館

一般的にイメージする城は、織豊期(織田信長と豊臣秀吉が中央政権を握っていた時代)に始まり江戸初期に発展した様式です。

それ以前、戦国時代までの城は、土を削って堀を作り、盛り上げて土塁を作り、その区画内に建物や庭園などが配置されているだけのもので、軍事施設としての城郭と一族の居住空間としての居館を併せ持ち「城館」とよばれます。城館は地侍や名主など小領主支配の拠点として出発し、有事のときに城や砦として取り立てられるだけの条件も備えていました。このような城が、数の上では圧倒的に多いのです。

長久手には城館跡と呼べる遺跡が4か所あります。岩作城、岩作西城、長久手城、大草城です。

城館が作られた時代

戦国時代の長久手を含む尾張北東部は、松平氏の勢力下におかれしかもそこは、織田勢力との接点ともなる不安定な地域でした。

また長久手は全国有数の窯業生産地で、農業と共に村の経済を支えていました。

城館の形状

堀をはさんで、方形の東城と西城が並立する構造で、それぞれの総面積はおよそ1200平方メートルであったことがわかっています。

長久手城址碑

長久手城の歴史

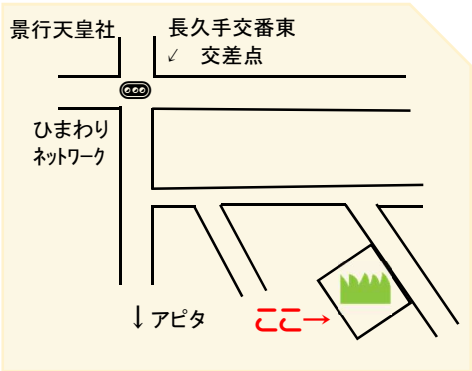
長久手城の築城は、永享年間(1429～41)と伝えられ、何人かの居住のあと、弘治2年(1556)以降加藤太郎右衛門忠景が旧城を修築して居住。そして天正12年(1584)の小牧・長久手合戦時は家康に従い、義弟岩崎城主の丹羽氏次の留守を預かって池田恒興に敗れ戦死しました。長久手城付近も戦場となり、焼かれて廃城となりました。その後江戸時代の文化6年(1809)子孫の尾張藩士が訪れ、石標を建てて供養しました。

「加藤太郎右衛門忠景宅址」の石標

お地蔵様は小牧・長久手の戦での、多くの無名の戦死者、処刑者を供養するために建立されました。

この城館は遺構こそありませんが、時の権力者たちを支えたのは、まぎれもなく無数の名もなき人々なのだということを伝える、大切な場所になっています。

(二村記)



観音堂　長久手観音は、城主加藤氏の守り観音でしたが、落城するとき奥方が土塁の中に隠し、後年掘り起こされました。現在、観音堂はがらんどうで観音様は豊善院に遷座されました。

そこで編集部員が打越の西小学校北にある豊善院を訪ねてみたところ、高さ20センチほどの小さな観音様は本堂の中の薬師如来像と一緒に丁重にまつられていました。

地図　江戸時代には農家が建て込んで遺構はかなり崩れていました。そして近年の区画整理で地形が大きく変わりました。東南120メートル先に「血の池公園」があります。

地名の標識　長久手合戦時、加藤太郎右衛門忠景の一族の住む城館があったことからこの地名になりました。

参考・引用文献
「長久手町史本文編」
「長久手町史資料編5」
「平成20年度 長久手町郷土資料室 長久手の地名展」
長久手町教育委員会
「長久手の地名Ⅲ」小林元著